

# つぎつぎ

vol.2

雁木町家のある高田をつなぐマガジン



上越市高田の市街地には、「雁木の  
ある町家」が立ち並んでいます。多  
雪という気候風土の中、今日も雁木  
のあるまちの暮らしは受け継がれてい  
ます。しかし、人々は進学や就職を  
機に、雁木のまちを離れてきました。  
少子化と親世代の高齢化は進み、空  
き家と空き地は増えていきます。

このまちの住みやすきは、自分の  
力に加えて『助け合い』の心に支え  
られてきました。そこに共感し、「ま  
ちの暮らし」を引き継ごうとする人々  
のさまざまな営みを紹介します。

今、途切れながらも長く連なる雁  
木が、この先、受け継ごうと思う人々  
につながることを願います。

一般社団法人 雁木のまち再生

### お願い

お手元のこの冊子を  
別居のご家族や  
上越を離れたご友人等に  
お送りいただき、  
雁木のまち高田の未来に  
想いを致す人の輪を  
広げていただければ  
幸いです。





# 雁木町家の

# 時代

*Era of Gangi Machiya,  
Between Past and Future.*

## 引き算の再生 掛け算の活用

高田の「仲町」といえば、駅前の飲食街のイメージが強い。しかし、少し離れると静かな住宅地に町家が立ち並び、雁木通りが続く。

令和四年秋、その一角に「もと山静堂」はオープンした。

仲町通りから見える外観はさりげないが、中に入ると吹き抜けのチャノマの壁に掛けられた日本画が目を見く。オーナーの川合由美子さんの父で高田にゆかりのある日本画家 川合清さんの作品だ。

雁木に面する障子の前には百年前につくられたシュタインヴェークのグランドピアノ。中ほどの談話室は美術書などのライブラリー。その奥にカウンターがあり、ドリンクや軽食を楽しむことができる。二階の渡り廊下は表と裏の部屋をつないでいる。昔ながらの雁木町家の室内に西洋の楽器と日本画がしっくりと溶け込み、対比と調和の面白さを感じる。

この町家は百五十年程前に大工の自宅として建てられて、その後、表貝店「山静堂」が営まれていた。川合さんはこの家を買って取ってか

ら改修を行ったが、新しい素材や家具を足そうとせず、むしろ「引き算」から始めた。壁の合板を剥がして、古い土壁を現したまま補修し、台所にあった茶室と表具の作業板を組み合わせてテーブルにした。元々あったものを再利用し、細部には川合さんのこだわりが垣間見られ、魅力的な「繕い」が施されている。

十月にはお披露目を兼ねて「アイルランドとスコットランド伝統音楽ライブ」を開催した。今後もこの町家の空間を楽しみながら、音楽や美術のイベントを開催していく予定である。「最近のコンサートはよく知られた曲を演奏することが多いが、ほかにも心をつかまれる作品はある。好みは人それぞれ、評判で価値を決めたくない。知らない音楽は聴かない、興味のない作品は見ない、という考えでなく、気軽に音楽や美術にふれる場所にしていきたい」と、静かな情熱を語られた。

この空間には、どのように楽器の音色が響き渡り聞こえてくるのだろうか。ここでしか味わえない音楽を聴いてみたいと感じた。

また、仲町の雁木通りを活性化していきたいとも話された。雁木町家といえば高田小町周辺が注目されてきたが、雁木の延長は約十三キロに及び、北本町と南本町、東本町から稲田、四ヶ所、戸野目へ途切れながらも続く。空き地や空き家は目立ってきたが、その一方で活用する人は少しずつ増えている。

昔は職人町として活気があった雁木通りは、住むだけでなく店や工房として、再び賑わいのあるまちになっていくだろうか。川合さんは「自分の好きなことから、人々が集う場所を作りたい」と語る。世代やジャンルを問わず、これまでの「型」にもとらわれず、自分のやりたいことに挑戦できる時代。雁木町家に関心を寄せる人々は続くだろう。

### Interview



もと山静堂 オーナー  
川合 由美子  
Yumiko Kawai

東京都出身。父の川合清氏（日本画家）の新潟大学教育学部高田分校芸能学科（当時）への赴任に伴い、4～14歳まで高田で過ごした。

その後、高校から大学では音楽を専攻。チェンバロ奏者として活躍するとともに、古楽器奏者を中心とする演奏会を企画してきた。時には、川合AKAとして、三絃、パーカッション類、the Stick、アナログシンセなど、ジャンルにとらわれない演奏活動を行っている。

2016年に仲町の町家を購入して移住。上越市本町のまちかど交流館（旧第四銀行高田支店）では、古楽器の繊細な響きを生かす巧みな演奏家たちのコンサートシリーズを開催している。

### 司法書士のつぶやき



## 「相続放棄」を考える前に

雁木のまち再生 理事 岩野 秀人

「親名義の建物が手に余るので相続放棄をしたい」という相談が急増しています。しかし、事はそう簡単ではありません。

まず、相続放棄は3か月以内に家庭裁判所に申し立てをする必要があります。「不動産は要らないがお金は欲しい」という選択はできません。さらに、子供の全員が相続放棄をすると、場合によっては叔父叔母にまで手続きをしてもらうことになり、親族のひんしゆくを買う可能性もあります。たとえ相続人全員が相続放棄をしたとしても、建物を管理する「相続財産管理人」を家庭裁判所から選任してもらわないと、建物の損壊等による損害の賠償を近隣の住人等から請求される可能性が残ってしまいます。

相続人にとっては取り壊すにもお金がかかり、価値のない「負債産」だとしても、世の中には古い建物に魅力を感じる人もいます。雁木のまち再生は、そんな人たちの橋渡しをしたいと思い活動しています。



### もと山静堂

新潟県上越市仲町2-5-22  
TEL 090-3573-8731  
当面は新型コロナ感染対策としてイベント開催時と電話予約時のみ開館

# とある町家の

使い手は変われど、縁はつながる

# 今昔つぎつぎ物語

大町三丁目のとある雁木町家は明治中頃の建築。長い間に職種も住人も移り変わってきました。最近の変化には「人の縁」が浮かんできます。

和たし  
じかん



t o k i

和み雑貨とインテリア  
ここちすたいる

イラスト屋ひぐち

秋山綾子さん  
ひぐちキミヨさん

国際フリースクール

I C A N

チャイラー・  
ストラットンさん

小山留美子さん  
五十嵐郁代さん



三人の縁  
左から ひぐちキミヨさん、秋山綾子さん、小山留美子さん

## 雁木町家リノベーションのはじまりは「想いを形に！」

秋山綾子さんはインテリアコーディネーターの資格を取り、当時は珍しかった「和雑貨ショップ」を目指していました。ちょうど「雁木の町を元気にしたい」と願う仲間と出会い「想いを形に！」が原点となり、2005年に開店。雁木町家再生の走りでした。和洋ミックスのインテリア、珪藻土塗の壁に北欧のファブリック、小物やお洒落な手ぬぐいが似合う町家は、借り手が変わっても引き継がれています。



ひぐちキミヨさん画  
当時の「ここちすたいる」

## 町家のコミュニティスペース 子どもと家族から「まち」へ

チャイラー・ストラットンさんが運営する国際フリースクールICAN(2005年設立のNPO法人)は、「通うフリースクール」として、不登校児童とその家族をサポートしてきました。2017年の春にこの町家に移転してからは、「まちライブラリー」のワークショップや外国人教師の研修プログラムで、雁木通りの魅力も紹介できたそうです。

コロナの影響で事業を控えたこともあり、2021年に移転しました。



今も残る雁木前シャッターの絵は町家フリースペースICAN時代のもの。ひぐちキミヨさんが描きました。

## この町家に決めたのは 知人からの詳しい情報

「和たしじかん藤喜」の小山留美子さんが日本舞踊の稽古場を探していたのは2021年、コロナ感染の拡大で練習場とする公共施設が閉鎖されていた時のことです。小山さんは日本舞踊の名取であり、稽古場とあわせて師匠から譲り受けた多くの衣装の保管場所も探していました。いずれは様々な人が集まり交流できる場所をつくりたい。子どもたちに和の伝統文化を広めたいと思っていました。



左：小山さん  
右：五十嵐さん

まちづくりに関わる五十嵐郁代さんとは互いの家族を通じて縁がたがなり、場所探しを相談していました。さらに、知人であるひぐちさんと秋山さんが、以前にそこでお店をしていたことから、高田の町家につながりました。

他の町家も見学しましたが、立地、賃料と間取りなど、二人からの情報が決め手になりました。内装に手を加えずに入居できたので、初期費用を抑えることもできました。今も、秋山さん、樋口さんと一緒にイベントを開催しています。



## 「好きな着物」で まちにもにぎわいを

大町通りの雁木の前では、二と七のつく日に朝市が開かれます。近くには小学校があり、校外学習で子どもたちが訪れる機会もあるでしょう。様々なイベント開催にも都合のいい立地です。にぎやかな観覧会が開催される高田城址公園は徒歩数分であり、着物を着るきっかけづくりとして、師匠から譲り受けた踊りの衣装を着付けて散策してもらおうと、着物のレンタルと着付けを始めました。

恒例の行事に合う着物や成人式の振袖、



七五三祝いの衣装もそろえてあります。町家界隈を散策して、プロのカメラマンに撮影してもらおうプランを実現し、周辺町内や商店街のイベントに着物で出演する企画もあります。「着物好きさん」によるファッションショーの開催など、大人が楽しむ様々な和の伝統文化を体験して『わたし自身』の時間を楽しんでほしい。

## 日本の伝統と文化を 子どもたちに伝えたい

小山さんは文化庁の伝統文化親子教室事業に関わり、小中学校のクラブ活動にも協力してきました。義務教育で「伝統や文化」を学ぶ機会として、保健体育に武術が組み込まれましたが、日本舞踊は含まれていません。

また、今日の住宅には和室や床の間が珍しくなってきました。伝統文化の体験は特別なことではなく、日常生活で触れることが大切だと思い、もっと広めていきたいのですが、コロナ以降は発表会を自粛せざるを得ませんでした。

町家のいろいろなイベントのほか、今年高田祇園祭の民謡流しや上越各地に伝わる踊りにも挑戦して、お稽古からまちづくりにつながることを考えています。

## 大町の雁木通り 二七の朝市

高田に城下町が建てられたのは1614年、江戸時代初めのことです。当時から「町家」は職住一体の住居で、職人と商人は職種ごとに住む区域がほぼ決まっていました。明治以降は時代と世相を反映して、住まいの移転や商売替えが多くなりました。

アクセスのよい雁木通りの周辺には駐車場、公共施設、小中学校があり、お稽古事や学習塾、手仕事の工房、飲食や物販店舗にも便利です。

朝市では地元の野菜と日常食品が売られ、焙煎豆のカフェやキッチンカーも出店。徒歩や自転車の買い物客と馴染みの出店者の交流があります。



## 町家リノベと事業所運営のポイント 賃貸で利用するなら



雁木のまち再生理事  
ニトデザイン&リビルド代表  
打田亮介

まず、借りる前に大家さんと諸条件についてしっかりとすり合わせを行うのがよいと思います。最近では格安で貸してくれる代わりに、大家さんで一切の改修工費を負担しない、という条件も増えてきました。その場合でも、屋根の雨漏りはどうするか。撤退するときに、現状復旧はどこまで求めるか。などを事前に確認しておけば安心です。

気を付けることは、お隣さんや町内の方々との関係でしょうか。隣家には音が漏れやすいので、借り主側で気を使ってあげるのがよいでしょう。工事予算は少し余裕をもって考えてもらうのが望ましいですね。

また、町内の方々との関係はとても重要ですので、町内会には、かならず入ることをおすすめします。入居者・大家さん・近隣の方、みんなが納得できるような関係づくりもサポートしていきたいと思っています。



# くらしのつながる

雁木町家に暮らす人びと

定住  
建替

川田 俊一さん

コンパクトなまち

移住  
移転

原 理佐さん

健康な生活を実感



断熱化施工 © ERI DESIGN ROOM

風通しのよい南の物干し

最初が全国展開の住宅展示場を訪ねましたが『雁木通りの町家』と言っても理解してもらえません。友人の建築士に相談したところ、家族の要望を含め、この場所にふさわしい家を考えてもらい、工事完了まで丁寧にケアしてもらえました。地元の建築士と工務店に依頼してよかったですと思っています。

建替えを決めた経緯は？  
結婚を機に実家近くの二軒間口の町家に住み始めましたが、子どもが二人になると町家が手狭になってきました。そこで長年空き家だった隣家を取得して、古くなった自宅と合わせて、新たに建て替えました。

高田の雁木通りの利点は？  
幼い時から高田の雁木町家に住み続けてきました。大学進学で一度は離れましたが、卒業したら戻ってくるつもりでした。徒歩圏内に病院や商店などすべてが揃い、雨や雪の時も雁木を通れば問題ないので、不便さを感じたことはありません。春は観桜会、夏は祇園祭、秋はSAKE祭り、一年を通して多くのイベントが開催されて、歩いて遊びに行けます。高田はコンパクトに色々なことが集約されて面白いまちだと思います。

雁木町家の建替えで特殊な事情は？  
間口の狭さのため、解体費が相場の2倍近くかかりました。また、町家は隣家の壁と接しているため、解体後の隣家の外壁修繕はこちらで費用を持つというルールがあり、想定以上の出費でした。しかし、同じ場所でも、建替えにより住みやすい家になりました。これからも家族でここに住み続けていきたいと思っています。

町家の間取りは、風と光を生かして  
雁木通りの細長い敷地でしたが、2軒分の間口が広がったので、隣家とは離して建てました。基礎と構造柱を金物で補強する耐震化と、床下、外壁、屋根面の断熱は現在の住宅の基本です。雁木通りに面する車庫はシャッターではなく、スライド式の木製の縦格子にして、さり気なく区切るようにしました。小さいお子さんが道路に飛び出さない工夫にもなっています。

南北に細長い間取りですが、玄関から和室、キッチン、リビング、勝手口の仕切りは引戸にし、開放すれば風が通り抜けれます。家事動線に合わせて収納も多く取りました。風は階段を通って上下に流れるので、二階南側のサンルームは最高の干場になります。

《建築設計の白石絵理さん談》



耐震化施工 © ERI DESIGN ROOM



「いのり庵」仲町6-1-9 (不定期営業)



接客上手な保護猫「くる」この家に来て縁ができた同居を始めた

原理佐さんは、町家の暮らしに困ることはないと話しています。大雪の除雪で奮闘しつつも楽しみ、最近では同じ雁木通りの別の町家を借りて、土間で古物リサイクルショップ『いのり庵』も始めました。「使えるものを捨てるのはもったいない」という気持ちで町家暮らしを満喫しながら、様々な活動に関わる多くの人々と協力し、SNSにも積極的に発信しています。雁木とともに長くつながることを祈ります。

町家暮らしの楽しさは広がる！

「呼吸している家に住みたい」と、整体院兼用の貸家を探して雁木のまち再生が所有する町家を紹介してもらいました。初めて来たとき、その居心地の良さを感じて即決！2017年の秋に移転し、翌年からはゲストハウス(住宅民泊)も営業しています。

昔ながらの木造住宅の良さは？  
とにかく気持ち良いことが一番。体調面のトラブルもなくなり、健康に過ごしています。実際に町家に住んでみると使いやすいし、よく考えられた間取りだと思います。アパートではあきらめていましたが、元保護猫クロとの暮らしも実現しました。

関西から高田へ 移住の経緯は？  
整体術を学ぶために2010年に神戸から上越へ来ました。はじめは神戸で整体院兼住宅物件を探しましたが、条件が合わずにあきらめました。その後、直江津郊外に中古木造の貸家を見つけて移住したので、市街地のアパートに引越しました。新しい建物でしたが、夏は蒸し暑く、冬は湿気がこもり、心身ともに不調となってしまいました。「呼吸している家に住みたい」と、整体院兼用の貸家を探して雁木のまち再生が所有する町家を紹介してもらいました。初めて来たとき、その居心地の良さを感じて即決！2017年の秋に移転し、翌年からはゲストハウス(住宅民泊)も営業しています。



この冊子は(一社)北陸地域づくり協会の研究活動助成を受けて発行したものです。発行日:2023年2月22日 発行者:関 由有子 発行元:一般社団法人 雁木のまち再生 編集協力:池田なつき(株式会社 桐朋) 問合せ:ganginomachisaisei@gmail.com gangims.com



編集後記  
五十嵐 郁代 今昔つぎつぎ物語 雁木町家エッセイ  
空き家になる前につぎの人に渡すタイミングが大事だと、改めて思いました。今の住み手に寄り添い、つぎの使い手の思いを形にする「つなぎ手」の存在も含めて、情報整理の場が必要であると感じています。  
川田 光 雁木町家の時代 くらしくつながるくらし  
雁木町家の活用の仕方にも十色。固定概念にとらわれず、自分のやりたいことができる場所だと取材を通して感じました。この冊子をきっかけに、雁木町家に興味をもってくれる人が増えることを期待しています。  
小林 淳 表紙写真撮影(モデル:shun)  
桜の季節でロケーションもよく、何人かの仲間歩き回ったのを覚えています。高田は色々な魅力があり、写真を撮るには面白い町ですね。



活動初日はケーブルテレビの取材があった

教育とつながるまちづくり活動  
小学生の総合学習では、中心市街地や雁木通りの住民と一緒にまちづくり活動を体験する授業が行われています。  
今年度、大町小学校の5年生児童が、身近な雁木通りの空き家を生かす活動として「きらめき町家」に取り組みました。仲町6丁目では「町家を彩る」というテーマで、家族や友人を誘い合わせ公開しました。学校全体の発表会は、協力くださった地域の方々にも見ていただきました。  
市街地には子育ての場が充実しています。高田城址公園と市民プラザの子育て支援施設のほか、寺町には福祉交流プラザがあり、生涯学習のサポートが充実しています。また公立幼稚園と保育園だけでなく、仏教やキリスト教の特色を生かす幼児教育に取り組む施設もあります。(p.4の地図に記載)



数年前から、東本町の雁木町家で若い世代のチャレンジが目にとまるようになりました。住みながら、または通いでも「何か」始めるのに手ごろな場所かもしれません。ご近所に八百屋さんや飲食店ができて、昨年暮れに「たてよこ書店」が開店。一人から二人へ、二軒から三軒へ、仲間や地域との「縁」をつないでいく……。これからも見守っていきたいと思います。

## たてよこ書店

TATEYOKO SHOTEN

堀田滉樹さん

943-0825 新潟県上越市東本町2-1-4  
当面、毎月最初の1週間の営業を予定  
✉ tateyokosyoten214@gmail.com  
facebook/Instagram/note 情報掲載

### 古本屋は居場所になる

店主は東京都国分寺市在住、現役大学生の堀田滉樹さん。既に都内の公園で屋台の本屋を始めていた。次は「固定の書店」を目指して故郷高田の雁木通りへ物件探しに通い、この町家に出会った。ミセ土間には書棚もある、おあつらえ向きの物件。この町家を借りようと決めて、ガラス戸の向こうを行き交う小学生たちからも声を聞いた。目の前には母校の東本町小学校。当時の先生に再会し、授業にも参加した。「学校帰りに子どもが集まる場所にしたい」。

内装はある程度リフォーム済みだったので、あまり手を加えていない。年季を感じる天井や梁組を残して、古いタンスを陳列棚に転用。誰もが気軽に立ち寄れる場所にしたいと、DIY作業で工夫。小学生たちも手伝ってくれた。

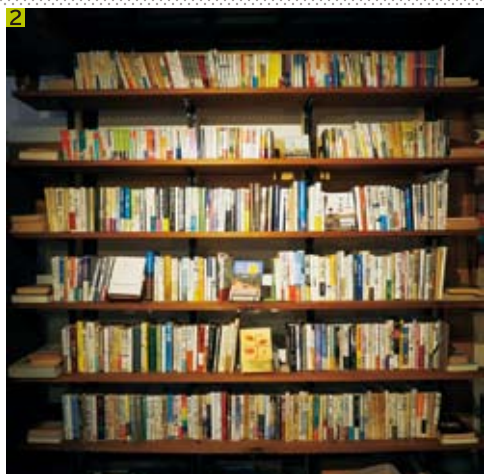
誰かの記憶の片隅に何となく残る場になり、ご近所のカフェでコーヒーを買って散歩したくなるような環境を作れたらと、想いを巡らせている。

### 若者がチャレンジするために

堀田さんはまず、資金・時間・人間関係等のハードルを下げて空き家を活かすことを考えた。大家さんやご近所と顔の見える関係も大切にしたい。「身軽に始めて数年間続けられれば、建物全体の活かし方と次のステップが見えてくるはず」と、ミセの奥や2階の活用も考えている。



1 富山大学の中村羽那さんが開業前に訪問。卒業制作に向けて町家の実測調査中  
2 本は大学の研究室や知人のツテでも集まる 3 軒下サインは店主の自作



本町6丁目の「スイミー 日本酒と古本の店」も若者が営む雁木町家の素敵なお店。名前の通り日本酒と古本が楽しめる。カフェのような居酒屋さんだ。

あのひと この場所 / feature!

# 雁木町家 Hot Spot

「古本」でつながる



## 耕文堂書店

KOBUNDO SHOTEN

943-0831 新潟県上越市仲町3-4-6  
025-522-1828 営業は14時から(不定休)

高田の仲町といえば飲食店街。老舗料亭「宇喜世」の南隣に古書専門の「耕文堂書店」があります。「歓楽街と古書店は相性がよい。路地奥とか古本屋にはロマンがある」と語る上越出身の店主は、神田の古書店に勤務されたのち、1979年にここで開業されました。

郷土史や大学の研究者も訪れ、専門書を引き取ることもあります。「店売りだけでは商売にならない」とも……。でも、積み重なる背表紙のタイトルをぼんやりと眺めるだけでも面白い。

長い間、市内で一軒だけの古書店でした。「何か」が見つかりそうな気がします。